

# 陝甘寧辺区の記念日活動と新曆・農曆の時間

丸 田 孝 志

## はじめに

中国共産党（以下、中共と略記）の革命運動と民衆の行動との関係に関しては、かねてより、土地革命などの社会経済政策、鄉村防衛組織や宗族などの社会的紐帯の動向、均分思想や家族主義などの道徳的規範の政治への反映、党の組織力など、様々な視角から議論がなされてきた。民衆の行動は、経済的、社会的様々な要因から説明されてきているが、近年においては、自らの安全の確保、次いで社会における人間関係、道徳規範への配慮、最後に経済的得失を考慮して行動を選択する農民像も提起されている。しかし、彼らの選択の条件の一つとして挙げられる道徳規範の問題には、民俗風習、民間信仰など言及されていない課題も多く、これらは社会経済的関係や政治的動員への凝集力などとの関わりの中で、更に考察されるべき対象として残されていると考える。

近年、中共の秧歌劇運動を論じたデビット・ホルム氏や、

中共の民衆文化政策に詳細な検討を加えた李世偉氏らによって、民衆文化と中共の革命運動に関する研究が開始されている。ホルム氏は、秧歌劇の宣伝活動が「封建迷信」、猥雑の要素を改造して進められながらも、伝統的宇宙観や易姓革命の思想を継承し、中共の威信確立に貢献していく状況を明らかにしている。李氏は、民衆の文化的嗜好に配慮した中共の文化政策の有効性を指摘しつつも、民衆文化の「かす」を取り去り、優れたものを発展させるという方針が、実際には、革命の必要に応じた臨機応変の対応となっていたことを指摘する。ここには、容易に改造されえない民衆文化の根強い自律性が認められている。小論では、先行研究が直接に取り上げなかった、民衆の生活の抛り所となる農曆の時間を素材として、中共の最も安定的な根拠地であった陝甘寧辺区（以下、陝区と略記）を対象に、中共が民衆の生活リズムとどのような関係をもとうとしたのかを検討する。その際、中共が革命運動の中で社会に浸透させようとした新曆の諸記念日および新曆の生活リズムとの関係をみていく。この作業を通じて、

民衆の行動規範と中共の政策との関わり的一端を明らかにしたい。

## 一 陝甘寧辺区の記念日と新暦の時間

中国において新暦が公的に採用されるのは、一九一二年元日（以下、西暦の上二桁は省略）の中華民国成立からであるが、周知のとおり社会的には農暦の影響力が長く保たれており、陝区においても、中共政権が公的に使用する新暦の時間と、社会的に使用される農暦の時間とが併存していた。新暦は、現実的必要性ばかりでなく、国際共産主義運動の理念の上からも重視された。新暦によって刻まれた国内外の革命運動、労働運動、国際共産主義運動などに関する諸事件は、中共の指導する革命の意義を過去とのつながりの中で確認するために、記念日として人々の共通の記憶とされる必要があるが、あった。

表1は陝区政府が、三十七年から四十七年三月の延安撤退にかけて記念活動を行った主な記念日とその活動状況を示したものである（三十七年九月以前は、陝甘寧ソビエト政府）。抗日民族統一戦線の成立を受けて、記念日の構成は、中共独自の革命路線を反映した記念日と、中華民国の擁護および国内外の反ファシズム統一戦線に関する記念日が共存する形となっている。新暦には中華民国の擁護という意義が加わり、陝区の機関紙の日付は、三十九年二月の『新中華報』改訂版より、

それまでの西暦から中華民国年を採用するようになっていく。これは延安撤退にもなう『解放日報』の停刊まで維持された。また、統一戦線の記念日には、表に示したものの以外に、国内少数民族と周辺諸民族に関するものも含まれ、これは日本の少数民族工作に対抗する意義をもつと同時に、日本帝国主義支配地域の民族矛盾、階級矛盾に矛先を向けたものである。三十九年よりモンゴル族のジンギスカン公祭（四〇年以降、旧三月二日に挙行）が、その後、回族の伝統的祝日（回曆）、朝鮮、台湾の反日闘争、日本共産党弾圧事件などの記念活動が行われるようになっていく。

各記念日において、中共はその政治的意義と当面の政治情勢に対する自らの立場を宣伝し、国内外に向けたアピールを発するとともに、各種動員目標を設定している。記念日を動員や生産競争の時間的起点や終点とし、余暇や娯楽の時間とすることで、政治意識を共有し、政権の時間的規律に従う辺区の動員体制の確立が目指された。また、記念日の活動は、複雑に変化する政治情勢の中で、国民党、国民政府を含む国内外の諸勢力の支持、支援を確保するとともに、陝区内の反共勢力の活動に対抗して、社会各層に政権の正統性を主張する上で重要であった。抗戦初期には、国民党の駐留軍や国民党党部代表などを招いた大会も行われ、国民党の県長や「頑固派」の妨害に対抗して、大会を開催している例も確認される。大会会場には、中華民国と陝区社会の統合の象徴として、孫文、蒋介石らの画像が、中共の指導者像とともに掲げられ、

表1 陝甘寧辺区の主な記念日と記念活動（1937年から47年3月延安撤退まで）

		37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47
* <u>元日(民国成立)</u>	1月1日	—	△	/	△	△	△	◎	◎	◎	△	△
レーニン逝去	1月21日	—	△	/	△	△	△	△	△	△	△	—
一・二八事変	1月28日	△	● <sup>J</sup>	/	—	—	—	—	—	—	—	△
二・七惨案	2月7日	○	○	◎	◎	△	△	△S	○	(◎) <sup>2</sup>	△	△
ソ連紅軍創設	2月23日	—	—	△	△	—	△	△	●	△	△	△
国際婦人デー	3月8日	●	◎	◎	◎	◎	◎S	△JS	△JS	○MS	△	(◎) <sup>4</sup>
+孫文逝去	3月12日	—	●	◎	△	—	◎	△	◎	△	△	
マルクス逝去	3月14日	—	—	○	△	—	—	—	—	—	—	
パリコミューン	3月18日	○	△	○	△	—	△	△	—	—	—	
北平惨案		○	△	○	—	△	—	△	—	—	—	
国際児童デー	4月4日	—	—	○	△	△	△	○S	○	△	—	
* <u>メーデー</u>	5月1日	●	●	●	●	●	●	△	● <sup>J</sup>	(○) <sup>3</sup>	●	
中国青年節	5月4日	—	○	●	●	●	△	○	●	(○) <sup>3</sup>	◎	
マルクス生誕	5月5日	—	—	—	○	○	○	○	○	—	△	
ナイチンゲールデー	5月12日	—	—	—	—	◎	△	△	△M	◎M	○	
五・三〇惨案	5月30日	●	●	△	△	—	△	△	—	—	—	
ゴーリキ逝去	6月18日	○	○	△	△	○	○	△	—	—	△	
中共成立	7月1日	—	●	○	△	△	△	△	△	○	△	
* <u>抗戦建国記念日</u>	7月7日	●	●	◎ <sup>J</sup>	●	●	● <sup>J</sup>	●	●	△	△	
* <u>紅軍創設</u>	8月1日	◎	—	—	△	△	○ <sup>J</sup>	○	○	○	○	
国際反戦デー		◎	○	●	△	—	—	—	—	—	—	
八・一宣言		—	○	—	△	—	—	—	—	—	—	
国際青年デー	9月上旬	◎	●	◎	●	●	△	○	—	—	△	
十九・一八事変	9月18日	●	●	◎	●	△ <sup>J</sup>	○	○	△	△	△	
* <u>国慶節</u>	10月10日	(◎) <sup>1</sup>	○	○	○	●	△	△	△ <sup>J</sup>	△	●	
魯迅逝去	10月19日	—	△	△	○	◎	○	△	—	△	△	
ロシア十月革命	11月7日	△	●	○	△	●	◎	● <sup>J</sup>	△	●	△	
ベチューン逝去	11月13日	—	—	○	○	○	△	△	△	—	—	
一二・九運動	12月9日	—	○	●	○	○	○	—	●	●	△	

『新中華報』、『解放日報』、『辺区群衆報』、『共產党人』などから作成

記念日名の下線は、主な休日

\*：44年5月19日「陝甘寧辺区政府弁公庁通知」により国旗を掲揚する日 +：同上により半旗を掲揚する日

(陝西省檔案館、陝西省社会科学院『陝甘寧辺区政府文献選編』第8輯、181～3頁、檔案出版社、1990年)

—：言及無し /：『新中華報』停刊中のため不明 △：機関紙面での言及など

○：小規模の個別集会、記念活動 △：各地区、機関等での同時の個別集会、記念活動

◎：延安での千人程度の代表大会（各地区大会等を含む）

△：延安での数千～数万人規模の大会、各界連合大会（各地区大会等を含む）

(ただし、△には数千規模の各地区での大会も含む)

(◎)<sup>1</sup>は「紅軍抗日戦争勝利祝賀大会」(◎)<sup>2</sup>は「彭雪楓追悼大会」

(○)<sup>3</sup>は解放区代表大会の予定、実施されたかは不明 (◎)<sup>4</sup>は「延安防衛大会」

右側のアルファベットは、S：節句、24節氣、M：廟会、J：集市の利用が確認できるもの

大会の名誉主席団には蒋介石も選出されている。<sup>1</sup>三八年のメーデーまでは、国共両党の旗が会場に掲げられていたが、その後、国旗が主要な記念日や臨時の諸大会において、街頭や会場に掲揚されるようになる。国共関係が極度に緊張した四三年の抗戦建国記念日の大会においても、国旗は街頭に掲げられるとともに入場の先導に使用され、中共が国民党に対抗する上でも、中華民国政府という枠組みを強く意識していたことが伺える。<sup>5</sup>

記念日の式典への参加や記念活動の構成は、学校、工場、軍隊、青年組織、婦女組織などの帰属集団に分けて行われている。フランス革命の諸式典は、職業、身分構成を排除し、参加者を年齢構成のみで区分した行列を組織したとされ、<sup>6</sup>均質な国民という理念を実現させようとする意図が伺えるが、陝区の式典においては、各帰属集団の抗戦と革命における役割を意識した構成がとられ、その下での諸階層の統合が意図されている。ただし、四二年以前の大会や記念活動において農民は、一部が青年、婦女、児童の組織に帰属して参加している他には、基本的に自衛軍もしくは「武装した民衆」として参加しており、<sup>7</sup>彼ら自身の職能団体や帰属集団は確認できない。陝区には組織上、辺区民衆敵後援会の下に、<sup>8</sup>辺区青年救国会、<sup>9</sup>辺区婦女連合会などと並んで、貧農会を改組した辺区農民会（会員四〇万程度）という農民組織があるが、<sup>8</sup>農民が実際にこのような組織を通じて記念活動に参加していないことは、この時点での政権の農民把握が専ら自衛軍として

動員できた範囲に止まっていたことを反映していると考えられる。また、工場労働者がしばしば休日から部分的に除外される一方で、婦人、児童、青年のみの休日が存在するなど、休日についても帰属集団を意識した編成が伺える。この他、記念日の構成には、農民固有の祝日がないことも確認できる。

辺区社会の精神的統合と現実の動員の必要から、一週間の生活リズムを含む新暦の時間は、行政組織、工場、学校、農村教育組織、自衛軍組織などを通じて浸透が図られていく。<sup>9</sup>

記念日の休暇に関する明確な規定を陝区の機関紙で確認できるのは、三九年のメーデー以降であるが、それ以前から記念日には、体育大会、演劇、宴会その他の娯楽活動が催されている。農村では、自衛軍訓練や「冬学」（農閑期の教育組織）、「クラブ」（教育、余暇、宣伝組織）に関する政令や政策などにおいて、記念日や一週間ごとの抗属（八路军などの軍隊へ兵士を送り出している家庭）への援助、慰問活動、一週間のリズムによる訓練、学習等が指示されている。また、四四年五月の「陝甘寧辺区政府弁公庁通知」（表1参照）<sup>10</sup>においては、国旗は記念日ばかりでなく日曜日にも、機関、学校、部隊、工場、商店に掲揚することが規定されている。

しかし、本来民衆の生活との関わりを持たない新暦のリズムは、その浸透が容易ではなく、冬学に関する政令は三八年より、徴粮の指示と合作社の会計年度は三九年より農暦による時期設定が行われている。<sup>11</sup>陳学昭によれば、延安においても各機関が一斉に新暦を採用するのは、三九年の元旦からで

あったという。陳はこれにより「一般民衆も新暦を用いるようになり」、「曆についての習慣はすっかり統一された」としているが、この状況は、むしろ社会における農暦の支配力の強さを想像させる。政権が社会との関わりを深めていくほど、農暦の時間への対応は避けて通れない問題となる。

## 二 陝甘寧辺区における農暦の民間活動と政治

### 動員

表2は、陝区における代表的な農暦の節句、二十四節気の一部と一年の農作業、および代表的な新暦の記念日の位置関係を示したものである。<sup>13</sup> 農暦の各節句は、農作業の進行と密接な結びつきをもち、作業の節目に、天候の安定と豊穰、一族の無病息災と繁栄などを祈り、あるいは感謝するため、祖先や各領域を支配する神仏を祭るものであり、余暇や娯楽の時間ともなる。黄道を二十四等分して設けられた二十四節気は、一年の太陽の動きを忠実に反映しており、農作業の進行の基準として重視されている。この中には清明、冬至などのように節句としての性格を持つものもある。<sup>14</sup> なお、中国の農暦は太陰太陽暦であり、二十四節気を基準にして約三十四カ月に一度閏月を設けることによって、季節感と十二カ月の関係のずれを最大一カ月程度に収める工夫がされている。二十四節気各節気に該当する日は、農暦では最大一カ月程度のずれを生じるが、新暦では毎年ほぼ同じ日にあたる。<sup>15</sup> 故に二

十四節気によって農作業を進めることは、事実上新暦に依拠することに等しいが、このような関係は曆に関する知識がなければ明確に意識されえない。

各地の廟会、集市もまた、農暦によって日取りが決められている。廟会は、神仏の生誕日などに会期が設けられ、加護を求める民衆が集まるという信仰活動の性格の他に、集市としての経済的な機能をも果たしている。節句の年中行事の多くが各家庭規模で行われるのに対し、廟会、集市は、大規模なものでは数千から数万に上る人々が、人口がまばらで分散した陝区の農村数十里周辺から集まり、遠隔地の商人なども訪れる。この他、職業神の生誕日は、各職業に従事する人々にとって重要な祭祀の日となる。<sup>16</sup>

このように民衆は、生活の様々な分野において農暦に依拠し、自らの生活規範、習慣に基づいて、ある共通の期待や願望をもって自発的に定められた行動を行う。民衆の自律的な行動と心性を把握して、行動が行われる時間と場所に対して、適切な宣伝、動員を行うことができれば、多くの成果を期待できる。<sup>17</sup> しかし、これを利用するには、農暦の活動に伴う民間信仰の要素、伝統的社会秩序や社会道徳などのいわゆる「封建」的要素への対応が同時に示されなければならない。農暦の時間への対応の問題は、日中全面戦争以来議論のなされてきた「民俗様式の利用と改造」問題に関わるものであった。

ソビエト政権時代より民謡や旧劇などの民俗の利用と改造を試みていた中共は、陝区においても、新暦の新年を含む記

表 2 陝甘寧辺区における24節気の農作業／新暦記念日／農暦活動

24節気（一部）の農作業と新暦記念日	主な農暦の節句と新暦の該当時期
(新暦)	12月23日 竈爺昇天 (47.1.14/39.2.11) 年越し準備
立春 2月5日 春耕準備 〔二七惨案〕	1月1日 春節 (47.1.22/39.2.19) 春節活動
啓蟄 3月6日 春耕開始 〔国際婦人デー〕	1月15日 元宵節 (47.2.5/39.3.5)
清明 4月5日 墓参 植樹 播種 〔メーデー〕〔中国青年節〕	2月2日 龍抬頭 (47.2.22/39.3.22) 春耕開始
立夏 5月6日 春小麦播種終了	4月8日 浴仏節 (41.5.3/39.5.26) 廟会
芒種 6月6日 黍など播種開始	5月5日 端午節 (41.5.30/44.6.25) 厄除け
夏至 6月22日 夏収開始 ～小暑 鋤草 変工 ～立秋	変工開始
〔中共成立記念〕〔抗戦建国記念〕	6月6日 麦収節 (41.6.30/44.7.25) 小麦収穫祭
小暑 7月7日 春小麦など収穫	
大暑 7月23日 冬小麦播種 ～秋分	
立秋 8月8日 (鋤草 ～秋分) 〔九一八事变〕	7月15日 中元節 (38.8.10/41.9.6) 秋収祈願 墓参
秋分 9月23日 秋収開始 〔国慶節〕	8月15日 中秋節 (46.9.10/38.10.8) 家人団欒 9月9日 重陽節 (46.10.3/38.10.31) 秋収祝賀
霜降 10月23日 秋収終了 〔十月革命〕	10月1日 寒衣節 (46.10.25./38.11.22) 墓参
冬至 12月22日 新春起点 (81日後) 〔新暦元旦〕	12月8日 臘八節 (46.12.30/39.1.27) 豊作祈願

農暦節句の数字（左／右）は、37年7月～47年3月で最も（早い／遅い）年の新暦日付  
農作業日程は地域により一カ月ほどのずれがあるが、延安地区を中心に整理した  
節句の名称、意味には地域によりずれがあるが、代表的なもので整理した

念日に旧劇や灯籠行列などの民俗  
様式を使用しており、春節には抗  
属慰問や下郷宣伝も行っている。  
また、三八年からは民衆劇団その  
他の職業劇団及び機関団体の劇団  
が、記念日などに旧劇を改造した  
宣伝劇を公演している。<sup>18)</sup>しかし、  
これらの活動が全辺区的な動きと  
して展開するには、整風運動を通  
じて、民俗様式に固有の価値を認  
める「マルクス主義の中国化」の  
方針が確定され、文芸の「工農兵」  
への普及と向上のために、幹部が  
組織的に動員されるのを待たなけ  
ればならなかった。<sup>19)</sup>  
日中全面戦争開始後の数年間、  
陝区の機関紙においては、農暦に  
依拠した可能性が強いにも関わら  
ず、これに言及しない例が多く見  
受けられる。四一年までの春節期  
の労働英雄大会、生産運動などは  
ともに春節に言及していない。三  
九年春節の『新中華報』一面の角  
には、「中国人民の領袖」として

毛沢東の画像が掲載されている。この欄は、新暦の記念日を絵とスローガンで示すのに使用されているもので、明らかに春節を意識したものと考えられるが、紙面はソ連紅軍創設記念日に際しての毛の論評を掲載するに止まり、春節には言及していない。<sup>(20)</sup> また、国民政府が清明節に行っていた黄帝陵での「民族掃墓節」式典への中共、ソビエト政府、陝区政府の代表派遣（三七年から三九年）や、四〇年の延属分区における清明節前後の植樹活動に関しても、清明節への言及はみられない。<sup>(21)</sup>

整風運動の発動期にあたる四二年二月の春節より、中共の農曆の時間の利用は明確な形をとっていくことになる。この年の春節は五日間の休日となり、延安市政府は「民間の習慣を尊重して各種娯楽宴会を禁止せず」、公安局は「爆竹を特に許可し」ている。元宵節には十里周圍の農民が妻子を連れて市内に流入し、「九年来、なかつた賑わい」を呈した。毛沢東の「延安幹部会議での講話」は、旧一二月二三日（年越し準備開始の日）に行われ、除夕（大晦日）より各種劇団による新旧劇の公演や機関、団体、クラブの娯楽活動が繰り広げられる。延安市文化クラブは、農曆元日を「毛沢東デー」とし、毛の経歴、著作等についての講演会を行い、中共中央宣伝部の会議では、康生が、後に整風文獻に指定される「反主観主義、セクト主義問題」の講話を行っている。辺区の暗部を一面的に強調したとして後に批判された風刺画展も、春節活動の一環として行われていた。また『解放日報』は、旧

一月四、五日には、「中国のマルクス・レーニン主義」である「毛沢東主義」の学習を訴えた張如心の「毛沢東の理論と戦術を学び掌握せよ」を、元宵節（春節活動最終日）翌日の旧一月一六日には、中共中央「在職幹部教育の決定」を掲載している。<sup>(22)</sup> 整風運動は、まず春節の祝賀活動を利用する形で本格的に発動されたのであった。

四三年以降、中共中央、八路軍総司令部、陝区政府は、春節期を擁政愛民・擁軍運動月に指定し、軍隊、政府、民衆、抗属の合同宴会、相互慰問、軍への慰労品、慰労金の供出などが行われるようになる。年賀状、民家の掃除、春聯書きなど、春節の習俗にあわせた民衆への奉仕活動や宣伝も、軍隊や各機関、学校によって広範に行われるようになる。綏徳分区では、春節の廟会で政府の劇団が演劇を行い、お布施的な募金が集められている。民衆は春節に縁起の悪いことを言うのを禁忌としていたので、擁政愛民運動の中で軍への意見、批判を聴取する際にも、軍民団結の雰囲気を作り上げるのに有利であったと考えられる。春節などの節句を豊か、賑やかに過ごすのは、民衆の幸福の尺度であり、この時期の娯楽活動、奉仕活動を通じて、八路軍進駐による生活の向上を印象づける目的があった。『解放日報』では、この意図に則した民衆の発言が宣伝されている。<sup>(23)</sup>

民衆が一年の豊穰と幸福を祈る春節は、生産運動にも重要な位置づけを与えられている。四三年より労働英雄運動が発動され、労働英雄や機関団体、農村の生産計画、生産競争が

発表されるようになる。<sup>24</sup> 年画は「竈の神」や「門神」などを改造して、労働英雄、農業生産、自衛軍、八路軍などをモチーフに描かれ、延安地区に移民した綏徳地区出身の農民が春節に帰省する機会を利用して、更なる移民の奨励が行われている。<sup>25</sup>

四四年以降の春節には、市民代表、労働英雄などが毛ら中央指導者に大会、宴会などで年始挨拶の会見をし、娯楽、宣伝活動において民衆、労働英雄の秧歌隊などの活動がみられるようになる。<sup>26</sup> 春節は新曆の記念日の構成に加えられていなかった農民の代表が登場する農民の祝日としての意義も持つことになる。また、四四年の元宵節前後には、各県で大規模な自衛軍検閲大会が開かれている。春節期は、この他、重要政策、方針が発表、宣伝される時期として重視されるようになった。四四年より開始された機関職員や民間の長寿者への祝寿活動は、四五年の春節以降、大規模に組織されているが、これは民衆の長幼秩序意識に訴えて、党、政府、軍は民衆の「子供」、民衆は党、政府、軍の「父」であるという形で、民衆の支持を取りつけるようとするものであった。この年、過去の擁軍運動が物資供出に偏重し、民衆が負担を感じているとの報告が出されており、より民衆を尊重する形式をとる必要が感じられたものと思われる。<sup>27</sup>

前述のように二十四節気は農作業の進行に重要な意味を持つが、中共は四二年秋以後、生産の指示の中でこれを強調するようになり、その際、「農諺」と呼ばれる農作業、農業技

術、天候に関する民間の諺も多用している。二十四節気による農作業は、労働英雄の一年の生産経験、生産計画などを通じて、実践、宣伝され、棉やジャガイモなど新たな作物の導入を含め、節気ごとの細かな作業日程が示されている。<sup>28</sup> 生産運動は、これらの民間の生産知識と時間の感覚を利用しながら進められた。幹部学習の計画も、二十四節気による農作業の進行を念頭に作られるものが現れ、機関、学校の休暇は、四四年以後、鋤草や秋収を援助できるような時期設定が行われるようになった。<sup>29</sup> また中共は、二十四節気は新曆によって容易に把握できる点を強調し、迷信的 성격の強い農曆を排して新曆を普及すべきことを主張している。<sup>30</sup> 春耕の到来を告げる啓蟄と龍抬頭のうち、二十四節気の啓蟄は非常に重視される生産運動の日程に取り入れられたが、迷信的要素が強く毎年新曆とずれを生じる龍抬頭は正面から取り上げられることはなかった。

新華書店発売のカレンダーは、四二年には新旧曆と二十四節気を併記したものを発行しており、また『解放日報』と『辺区群衆報』は、それぞれ四四年と四五年の一月より、日付に新旧曆と二十四節気を併記するようになった。四三年以後になると、農業以外にも各種動員工作や事件、事故の報道、広告、農村党支部の会合日程などにも農曆や二十四節気の記録、日程が大量に登場するようになる。

清明節は四二年以降、農作業の一過程として言及される他に、桑、果樹、棉などの植樹の日として明確に位置づけられ、

労働英雄と模範郷を中心に植樹運動が繰り広げられている。<sup>33</sup> 墓参などの側面については後述)。端午節は、四〇年には綏徳分区において、塩採取労働者を組織、動員する「塩工節」として利用され、四一年、四二年には、文芸界において民族的英雄、屈原記念の日として位置づけられる。四三年以後は、労働互助を推進する政府の意図の下、民間の労働互助である変工、扎工の開始時期としても言及され、学校の体育大会、娯楽会、駐留部隊の農村援助の例も確認される。また、四五年には、曲子県政府が、端午節を非常食糧としての南瓜を植える「種瓜節」とする試みを行っている。<sup>34</sup> 秋の収穫を祝う家族団欒の日である中秋節は、四三年以降、擁政愛民、擁軍運動の中に位置づけられ、軍、党、政府、民衆などの相互慰勞活動、娯楽活動の日となり、軍への物資供出に利用されるようになる。これらの活動によって家族主義的な団結の雰囲気盛りにすることが目指された。節句を豊かに送れることは、春節同様、辺区経済の発展や八路军の貢献によるものとして宣伝されている。その他、組織化が困難な小規模な農曆の節句も、個別の農村の慣習に従い、基層工作に利用されるようになってきている。<sup>35</sup> また、この時期の民謡改造は、十二月の節句などを歌い出しにする民謡に、労働互助を含む一年間の生産指示を盛り込む形もとられている。<sup>36</sup>

廟会は、迷信によって時間と財貨を浪費し、古い社会秩序を正当化するという面から、中共政権にとって本来的に否定されるべきものであった。しかし、災厄を免れ現世での幸福

を得ようとする民衆の信仰活動を強制的に排除することも容易にはできず、廟会を主幹事する現地の有力者が存在する場合、その排除は更に困難なものであったと考えられる。廢廟は学校や工場などとしても使用されていたが、三九年から四二年にかけて、辺区各地の軍や政府機関などが、自給のために廟を破壊して材木を売却し、民衆と対立する状況が生じ、辺区政府と八路军総司令部は、このような行為の禁止を命令している。<sup>38</sup> この状況は、廟や廟会を利用するという発想が、党、政府、軍の当事者に希薄であったことを伺わせ、この時期、廟会を利用した宣伝や大会はほとんど確認できない。

上述のような性格を持ちながらも、廟会は、分散した農村から多くの人々が共通の願望をもって集まる機会であり、その中には、普段外出する機会のない農村女性が、子供の出生や成長などを祈願するために集まるものも多く、平素、動員、組織が困難な人々を把握することのできる好機でもあった。また、経済活動を活発化し、辺区の危機を克服するという面からも、集市の機能をもつ廟会の利用が求められるようになった。活動を停止していた廟会も、四四年ごろには大半が復活したとされ、四四年の「不完全な統計」では、隴東分区で二七一カ所、三辺分区で三六七カ所、綏徳四県で演劇のあるものだけで五〇〇カ所余りの廟会が開かれている。人口一万余りの綏徳県で一年間に廟会に詣でる者の延べ人数は三十五万人で、女性を含めて毎年一人平均三回以上参会している計算になる。<sup>39</sup> 四二年以降、中共は廟会のこのような性格に着目

表3 陝甘寧辺区の代表的廟会（数千人～数万人規模）とその利用

場所、名称	会期（農暦）	内容
慶陽県桃花山	3月1日	43年 労働英雄、植棉模範奨励 44年 植棉教育宣伝 45年 植棉、衛生教育宣伝
綏徳県合龍山	3月3日	43年 労働英雄奨励、戦劇劇社など公演
淳陽県香山	3月15日 10月15日	42年ごろ～ 関中八一劇団等 47年ごろ 宣伝工作
米脂県娘娘廟	3月18日 (祈子節)	43年 婦女労働英雄奨励大会 45年 衛生、育児教育宣伝
子長県楊家園子	3月18日	45年 衛生、育児教育宣伝
甘泉六里廟香火大会	3月20日	43年 退役軍人模範ら奨励
綏徳市	3月28日	42年 辺区銀行懸賞金付貯蓄券当選発表
安塞白楊樹湾	4月ごろ	45年 衛生、育児教育宣伝
志丹市	4月8日	37年 救国宣伝
延安市清涼山	4月8日	44年 衛生教育宣伝、迷信打破 45年 衛生教育、凶作への対応宣伝
葭県白雲山	4月8日	43年 労働英雄、模範工属奨励 45年 綏徳文芸工作団など宣伝工作
延長県	4月8日	43年 婦女紡織運動宣伝
米脂県青雲山香煙会	4月8日	44年 印斗区生産業余劇団公演
延安県蟠龍香煙大会	4月27～30日	37年 普通選挙、生活改善等の宣伝
慶陽県	6月23日	44年 文教工作、生産教育、時事宣伝
慶陽県三十舖里高廟	7月12～30日	44年 衛生、育児、文教宣伝
延安県烏陽区娘娘廟	7月15日	46年 時事、衛生宣伝
米脂県	7月	46年 時事宣伝
靖辺県僅羊羔山	7月	46年 時事宣伝
同宜輝県大香山	10月中旬	42年 時事宣伝

『新中華報』、『解放日報』、『辺区群衆報』などから作成

しつづ、積極的な工作を進めていく。表3は、陝区の代表的廟会とその利用を示したものである。この他にも規模の不明な廟会二〇カ所余りでの活動が、機関紙上で確認される。三七、八年の廟会利用は、集まった人々を廟から移動させて、廟会の趣旨や人々の願望とは直接関係のない政治宣伝を行ったり、廟会に決

定的な役割をもつ劇団の組織も不十分で、技術的に洗練されていなかった。<sup>40</sup>四二年以降は、学校、軍隊、政府機関などの劇団が、改造した秧歌劇などを上演して、各種宣伝を行うようになり、宣伝の内容も、集まる人々の願望に配慮したものとなつてゐる。女性が集まる各地の娘々廟会などでは、婦女労働英雄の表彰、紡織の奨励、衛生、出産、育児に関する科学的知識の宣伝などが行われてゐる。

四四年からの疫病の大流行に際しては、迷信に頼らず、医療を受けることの重要性を民衆に理解させるために、衛生所の医師などが廟会に向き、医療知識の宣伝と患者の治療にあたるようになり、これを契機に廟会工作はより広範に展開されていく。この後、同年一月の辺区文教大会において、廟会工作の重要性は更に強調され、「廟会を利用し、廟会を消滅させる」方針の下、廟会には、社会教育、衛生宣伝、生産宣伝、模範奨励、時事宣伝など、様々な役割が期待されるようになる。廟会工作の模範例としては、慶陽県三十里舖高廟における「文化棚」（仮設の大衆教育館）の活動があげられ、同廟では、臨時助産訓練班、識字班、医務所などの活動が報告されている。廟会への喜捨や劇団の費用を合作社や民間学校の資金として使用している例も見受けられ、廟に貼られる宣伝用の対聯も、「民衆の不満を引き起こす」「中国を救え」、「日本を打倒せよ」などの政治宣伝から、「金のなる樹の葉を植えよう」、「労働力を交換すれば、四方の財が集まる」など、民衆の発財志向に沿う形での生産指示に変えられ

た例が確認される。<sup>41</sup>

集市は廟会同様、四二年以降、各種宣伝に活用される一方で、大規模な動員大会の場として利用されている。廟会に比して民間信仰に配慮する必要が少なく、<sup>42</sup>商業政策によって政府の管理下におけることが、その理由であると考えられる。また、日本や国民党の封鎖に対抗して辺区内の商業網を強化し、自給できない必需品を確保するためにも、その活性化が求められた。伝統的な集市ばかりでなく、中共政権下で復活、創設された集市も、三五年以後、集期が確認できるもの全てが農曆で運営されている。民衆の基本的な経済活動である集市は、彼ら固有の時間によって運営されなければ成立しえない上、辺区外の客商などを招致する必要からも、農曆による集市は現実の規定された選択であった。

陝区の大規模集市は驛馬大会と呼ばれ、家畜交易を中心としたことに名前が由来するが、家畜に限らず農産物、日用雑貨を始め様々な商品が取り引きされている。驛馬大会は年に一、二回、数週間から一カ月の会期で、陝区各地の代表的市場において開催され、最大規模のものでは辺区内外より毎日数千人から一万人が集まるとされる。驛馬大会は、清末まで遡る伝統的集市であるが、陝区の機関紙にその活動が報道されるのは四二年以降からで、中共が封鎖に対抗して、陝区の商業活動を活性化させる政策に転じた時期にはほぼ一致している。途絶していた延安や延長の大会が復活し、各地に新たな大会が創設され、各種宣伝や模範奨励の場などとして利用さ

表4 陝甘寧辺区の驛馬大会（数千人～数万人規模）とその利用

場所、名称	会期（農暦）	内容
延安市南門外	春節	44年 延安市民の秧歌隊活動
葭県	2月13～18日	45年 文教宣伝、生産展覧会、劇団公演
延川県文安駅	2月24日	42年 労働英雄奨励大会
	2月13日	44年 国際婦人デー記念大会、3月7日
慶陽市駅馬関	4月28日	42年 劇団の時事宣伝等
	～5月7日	44年 毛沢東画像販売、劇団公演
慶陽県	6月27日～7月4日	42年 七七宣言、各種法律宣伝
	9月27日～10月3日	43年 分区労働英雄大会、生産展覧会
	6月23日	44年 文教生産時事宣伝（廟会工作）
	10月1日	44年 分区労働英雄大会と同時開催
固臨県臨鎮	6月	44年 中心小学秧歌隊の衛生宣伝
環県	7月12～18日	42年 各種政策の宣伝
延安市新市場	7月15日～8月1日	44年 延安各劇団公演
	8月20日～	45年 抗戦勝利祝賀大会、劇団公演
	10月11日～11月3日	43年 辺区労働英雄大会、生産展覧会
志丹県	7月15日	43年 運塩英雄奨励大会
		44年 延安保安処秧歌隊など公演
安塞磚窑湾	7月15日～	44年 難民工場秧歌公演、巫神自白大会
米脂県	7月25日	46年 時事宣伝
綏徳県	8月2～7日	44年 魯迅芸術学院劇団公演
	10月10～11日	43年 分区労働英雄大会、生産展覧会
馬欄市	9月30日～	43年 分区労働英雄大会、生産展覧会

『解放日報』各所より作成

れるようになってくる。<sup>43</sup>

特に四三年の第一回辺区労働英雄大会は、旧九月、一〇月に開催された陝区主要市場の七つの驛馬大会と連動して準備、開催された。この内、三辺分区を除く陝区各分区と延安の驛馬大会は、各分区および延安各系統の生産展覧会・労働英雄大会と同時開催され、辺区レベルの大会に参加する労働英雄、模範生産者が選出されている。これに続き、延安驛馬大会の期間中に第三回辺区生産展覧会と第一回辺区労働英雄大会が延安で開催されている（表4参照）。労働英雄、模範生産者中、農民は七六％を占め、業種区分においても農業労働英雄が全体の五二％を占めており、新暦の記念活動において帰属集団や職業代表として見出すことができなかった農民が、この大会で自らを代表して参加している。また、市場を管理、経営する商人層も、合作事業英雄などとし

て大会の構成員となっている。<sup>(44)</sup>

労働英雄は「新社会」の「状元」と称され、彼らの延安行きと毛沢東らとの面会は状元の東京よりも名誉なことで讃えられており、ここには「昇官発財」の伝統的価値観の利用が伺える。<sup>(45)</sup> 大会終了後、彼らは各地に戻り、生産に励むとともに、基層における政策推進者として働くことが期待された。また、四四年の労働英雄大会は、一月始めの予定が延期されて、新暦一月二二日に開会されているが、この日は冬至に当たり、冬が極まり、春を迎える日として伝統的に重視されている日である。旧時、紳士は衙門に向いたり、相互に訪問し合い、この日を新年のように祝ったとされ、農民はこの日を起点として八十一日後に春耕を本格的に開始する。<sup>(46)</sup> 生産運動の優秀者を「状元」として讃え、新たな生産運動の起点となる日として、冬至は最もふさわしい日であったと考えられる。

陝区の数千から数万人規模の驟馬大会の内、宣伝、大会などの利用内容が明らかかなものは、表4のとおりである。これ以外にも規模や利用内容の不明なものが多数確認されるが、一般的に大集市には演劇がともなうので、これらの大会でも各種劇団の宣伝劇が公演されたことは推察できる。その他、各地の大小多数の集市が、模範奨励大会、生産宣伝などに利用されている。表5は、安塞県真武洞集市（同県政府所在地）を例に、その状況を示したものである。また、国民党との軍事緊張が高まった四三年七月、各地で緊急の辺区防衛民衆大

表5 安塞県真武洞市場の集市利用（旧4.9日集期）

41年7月24日	新9月15日 「九一八」事変、国際青年デー記念大会
42年5月24日	新7月7日 各界連合の抗戦建国記念大会
42年7月24, 26, 27日	驟馬大会において、民衆、公糧を送付
42年12月19日	擁軍生産大会 500余人参加
43年2月4日	新3月9日 労働英雄、春耕動員大会 国際婦人デー大会
43年3月ごろ	労働英雄奨励大会
43年9月14日	運塩模範、模範驟馬店の奨励
43年10月9日	新11月6日 10月革命記念大会 今年の徴糧公布
43年10月24日～	驟馬大会 県代表労働英雄の延安行き歓送、公糧納付の例
44年春節	県労働英雄大会 安塞保育院小学秧歌隊、平劇院の活動
44年8月24日	国慶節 市郷労働英雄選挙
46年7月24日	驟馬大会

『解放日報』各所より作成 日付は農暦

会、自衛軍検閲大会が開かれるが、このうち延安、延長県の三つの地区の大会は集市に乗じて民衆を動員しており、集市の凝集力が活用されたことが伺える。<sup>48</sup>

集市は民衆の生活サイクルの単位でもあり、大会の形式でなくとも、生産や学習、宣伝等において、そのリズムが組み入れられている。安塞県真武洞、綏徳県義合区などの集市には「黑板报」が導入され、ニュースや生活に関わる知識が提供されている。<sup>48</sup>延長県城内で行われた区級幹部の整風学習においては、城内集市の日を利用して、区級幹部が集市に向いた自分の区の民衆を指導する計画が立てられ、子洲県の一村落では、集市を代表による買付けと下肥拾いの日として組み込んで運営される生産、学習組織の例が報告されている。なお、集市との関係は不明であるが、綏徳県の二つの村落では、農暦の十日間のリズムで運営される学習組織の例も報告され、綏徳分区では四五年に学校教育の一週間のリズムが農村にそぐわないとして、見直しが指示されている。<sup>49</sup>

### 三 新暦の記念日活動と農暦活動の相互浸透

四二年以降、農暦の諸活動は積極的に利用されていくが、中共政権は新暦の記念活動も同様に組織し続けており、その重要性が減じることはなかった。ただし、陝区の危機克服の過程において、政治的宣伝に比して生産や民生改善に関わる宣伝、工作が充実され、当面の政治情勢と辺区社会の問題に

接点を持ちにくい記念日や、大規模な大会は次第に整理されていく。各鄉村一律の同時大会も放棄され、関係機関や職場地域、鄉村ごとの実質的な動員を重視した記念活動に取って代わられる。一部の宣伝、動員工作は農暦の節句や廟会、集市に譲られるようになる。一方、記念活動における民俗様式の使用は、民衆に新暦の記念日を自身のものとして認識させる上で重視されるとともに、新暦の記念日と農暦の重要な時間が重なったり接近している場合、農暦の時間を利用して、新暦の記念日の意義を浸透させていく方策がとられるようになる（表1も参照）。中共政権は、新暦の記念日を浸透させようとする一方で、民衆の心性に合致し、自発的に民衆を動員へと向かわせる可能性をもった農暦の利点を知り、この二つの時間を動員工作の中で充分に活用しようとしていた。このようにして、新暦の記念日活動と農暦活動は相互に浸透していく。

整風運動期には、魯迅芸術学院を中心に開始された秧歌劇の改造運動が全辺区に広がり、党、政府、軍隊、学校、商会その他の団体や民衆が、広範に秧歌隊や劇団を組織して、新暦の記念日やその他の重要な大会で宣伝劇や娯楽活動を行うようになっていく。新暦の新年にも、旧劇、春聯、講談、年賀状、清掃などの春節の民俗様式がより豊富に取り入れられ、秧歌隊などによる中央指導者への年始挨拶や、党、政府による民衆への祝寿活動も、春節と同様に行われている。<sup>50</sup>また、国際婦人デーや中国青年節、抗戦建国記念日、一〇月革命記

念日など多くの記念大会において、民衆は春節などの節句と同様に新しい服を身につけて参加していることが確認される。<sup>53</sup>

安塞県真武洞における四三年の国際婦人デー記念大会は、集市の日の旧二月四日(新曆三月九日)に労働英雄奨励大会、春耕動員大会として開催され、四〇里周田の青年農民や新服を着た農村女性と子供を含む五千人が動員されている。この日の二日前は春耕開始を告げる啓蟄(新曆三月七日)と龍抬頭(旧二月二日)にあたり、大会では、啓蟄の春耕開始の儀礼と同様に角に赤い布を纏った耕牛が牽き出され、労働英雄に賞品として渡されている。正業に励まない「ごろつき」に指定された者は、自らの「悪事」が書かれた白札を首に下げて批判を受け、大会の夜には、元宵節や龍抬頭の夜に行われる「転九曲」と呼ばれる灯籠のくぐり抜けが行われている。<sup>52</sup> 真武洞では、この他にも新曆の各記念大会が集市の日に開かれている(表5)。その他、集市を利用した各地の記念大会には、四二年、清澗県の抗戦建国記念日、四四年、新正県の中国青年節、延安県文安駅驛馬大会の国際婦人デーの大会が確認される。また、四三年の各地驛馬大会、労働英雄大会、生産展覽会の会期は一〇月革命記念日に重なり、記念大会も開かれている。<sup>53</sup>

四五年の国際婦人デーの記念活動は、気候が安定せず農繁期にかかる新曆三月八日に民衆大会を開く形式をやめて、元宵節前後三日間の農村女性が家を出て遊興に赴く日や、旧三

月八日、四月八日の各地の子宝祈願等の廟会を利用して、宣伝、展覽会などを開催する方法に転換している。<sup>54</sup> 辺区保育院小学校は、四三年の国際児童デーに春季郊外旅行を組織しているが、この日程は清明節に重なっており、清明節に郊外で遊興する民間の習慣に依拠したものと考えられる。<sup>55</sup>

また、新曆と農曆の二つの時間によって、宣伝、動員工作の時間的根拠が増加し、新曆新年と春節は、徴糧や生産計画を含めて連続した宣伝、動員期間として重視された。特に生産運動は、この二つの時間を徹底的に利用して生産を強調している。衛生工作では、春節や清明節の民俗に依拠して民家や街の清掃が行われるとともに、新曆の諸記念日にも清掃が行われている。<sup>56</sup> 四四、四五年のナイチンゲールデーの活動は、前述の廟会活動と連動して行われた。このように農曆の時間は、民衆の効率的な動員に積極的に活用されたが、中共政権は、民俗様式を利用しながらも、農曆に関わりなく重要な記念大会を多く開催しており、新曆の時間浸透の方針は維持されていた。集市の日に多くの記念大会を組織した安塞県真武洞においても、集市に関わらない記念大会が多数開催されている。

基層においても記念日は、労働互助組織、学習組織、民間学校、労働英雄などを通じて、娯楽会、模範奨励、学校や合作社設立の日などとして、より実質的な形で浸透が図られている。<sup>57</sup> また、三七年ごろの一般的な一週間のリズムによる動員の指示は、個別の郷村の教育、自衛軍訓練の具体的計画

となつて現れている。毎年の冬学の開始日は基本的に農暦で示されているが、運営においては一週間のリズムが多く確認される。米脂県印斗区高家溝の民間学校は、四四年の旧三月三日に設立されたが、やはり一週間のリズムで運営されており、これらの一週間リズムの計画は、集市や農暦リズムの計画よりも具体例が豊富である。<sup>58</sup> また、前述の集市を組み込んだ学習、生産計画などでは、経済上、宣伝上の効果が望まれない小集市が時間と財貨の浪費につながらないように配慮されており、利用価値のない小廟会も同様に制限、禁止されていた。<sup>59</sup> 『解放日報』紙上では、春節などの労働禁忌を破って働く労働英雄や模範幹部、模範郷の例が多く報道されており、時間に関する禁忌を破る上でも、彼らの中心的役割が期待されていた。<sup>60</sup>

農暦活動の活発な利用の背後には、このような新暦浸透の意図をみることができ、政権の新暦定着の努力は、農暦の時間と矛盾を生じることもあったと考えられる。詳細な状況を明らかにすることはできないが、農作業の組織においてその一端を伺うことができる。農暦と二十四節気のずれは、民間においても農諺と暦によって調整可能ではあるが、主に労働強化と労働力の組織化による増産を奨励していた政権は、農暦の要素をできる限り排除して、時間的により正確な作業慣行を普及させようとしていた。しかし、農作業の進行を二十四節気のみで組織することはできず、労働英雄や模範郷などの生産記録にも農暦の日付や龍抬頭、端午節、麦收節、中元

節などの節句が現れている。<sup>61</sup> これは、農暦の一定の合理性、信仰や慣習上の問題の他に、農暦でのみ機能する労働互助、集市などの農村の社会的な生活のリズムが影響しているものと考えられる。陝北の農民は一般に龍抬頭に春耕を開始するとされ、四四年にさほど強調されなかった啓塾が四五年に再び強調されるのは、この年の龍抬頭が例年よりも遅い新暦三月一五日にあたっていたことによると推察される。労働互助を通常の安定的な組織にすることを意図していた政権にとって、端午節の変工、扎工は満足できるものではなかったためか、『解放日報』ではこの消息を新暦のみで伝え、端午節に触れない例も見受けられる。<sup>63</sup>

#### 四 民間信仰と農暦の時間

本節においては、農暦活動に関わる民間信仰の問題について、中共の対応を見ていく。中共は、後進農村地域を根拠地として抗戦と革命を遂行する困難な状況の中で、民衆の迷信打破を最優先の課題とするような状況にはなかった。宗教一般に対して、中共は、状況によっては必要な協力関係を結び、政権の安定と政治目的の達成を図っていた。ソビエト期には「哥老会」と同盟し、統一戦線転換後は、三九年の「施政綱領」で人民の信仰の自由の保障をうたい、少数民族の宗教活動を支援し、四四年以降はキリスト教会の社会教育活動を政府の文教工作に取り込んでいる。宗教ないし迷信への対抗が組織

的に行われるのは、反共組織の宗教利用への対抗や、四四年、四五年の疫病大流行下の反巫神運動などのように、抗戦動員や政権の安定に深刻な影響を与える場合においてのみであった。民衆も、貧困、医療施設の不足、相次ぐ天災や疫病の中で、現実的な救済策が早急にとられない限り、信仰にすがるとはなかった。四四年の衛生工作の目標は、五年内に各区に一つの医療所、各郷に助産婦一人を置くという水準であり、四四年一二月の段階で、医者は漢方医が質を問わず全辺区で千人、機関、部隊の西洋医が二百人であるのに対して、巫神は二千人であったとされる。「政府は我々に巫神の治療を受けさせないが、葉屋も増やさず、医者も養成しない。」と民衆に批判を受ける所以である。<sup>66</sup>

基層幹部自身もまた、民間信仰の世界に生きる人々であることが、政権の民間信仰への対応を複雑にしていた。四四年の調査によれば、延安県の区級幹部の大多数が神仙を信じていたとされ、その他の地区でも幹部が雨乞いに参加したり、労働英雄がこれに期待をかけるなど、民間信仰に生きる多くの幹部の姿が報告されている。更に、巫神の役割を演じる駐軍の獣医や行政主任などの例も確認される。<sup>66</sup> 廟会や集市で秧歌劇などの新しい内容の宣伝劇を演じることのできる劇団は、絶対数が不足していた。民間の秧歌隊は、四四年一二月段階で、全辺区の秧歌隊九九四隊中、古いものは六一八隊、完全に新しいものはわずか七七隊という状況であった。このため、廟会や集市、春節の活動などでは、往々にして改造さ

れた新劇と「封建迷信」の旧劇が抱き合わせで上演されることとなり、その後もこの状況が急速に変わることはなかった。このような状況の下、中共政権は民間信仰とも一定の妥協をしながら、その改良を進めざるを得なかった。<sup>66</sup>

農曆の活動との関係において、まず明らかなことは、死者、祖先崇拜に関するものの利用が慎重に行われていたことである。「民族掃墓節」参列が途絶えてからの清明節の利用は、墓参には触れずに植樹運動に集中している。清明節について墓参や死者に関するものは、陝区内では四五年四月の綏徳駐留軍の革命烈士墓への墓参と、四四年清明節の『解放日報』に掲載された、母を回顧する朱徳の文章をみるのみである。

『辺区群衆報』では、墓参よりも開墾が重要だとして、清明節に開墾を行う農民開墾組の姿も報じられている。<sup>66</sup> 秋の豊作を祈願し、大規模集市が集中する中元節は、「鬼節」としての祖先崇拜の側面が取り上げられず、純粹な墓参の日である寒衣節は完全に無視されている。<sup>66</sup>

これに対し、抗戦と革命による犠牲者の追悼は基本的に新曆の記念日に行われ、毎年、抗戦建国記念日に追悼式典が舉行されている（三八年は、孫文逝去の日にも舉行）。四一年には、陝区政府による革命公墓建設が進められ、毎年、抗戦建国記念日に墓前での公祭が行われることになった。慶陽県では、抗戦建国記念日に烈士記念碑、記念塔が設立されている。<sup>66</sup> また、陝北ソビエトの指導者、劉志丹の公祭は、四二年の一〇月革命記念日前後に予定され、その後、四三年のメー

デーに延期されている（実際には五月二日開催）<sup>91</sup>。なお、清明節が革命烈士墓の墓参の日として正式に位置づけられるのは、四九年三月の陝区政府の条例によってである<sup>92</sup>。これは、抗戦建国記念日が抗戦勝利によって意義を失ったこと以外に、陝区が内戦の戦場となり、多くの死者を出すに及んで、死者を祭る民間の慣習に配慮せざるを得ない状況が生じたことを推測させる。前線の根拠地では、抗戦期より清明節の革命烈士墓への墓参が始められていることがこの点を示唆する。

生産意欲を刺激する信仰はむしろ利用されることがあった。啓蟄の春耕において、鋤で耕地に円と十字を描き四方の神を祭る儀礼は、『解放日報』では農民が生産に励む一コマとしてのみ紹介されている。また、四三年より毎年、新暦新年や春節、春耕期に、一年の豊作を予兆する「瑞雪」のニュースが繰り返して報道されている。春節期の雪は、冬小麦の成長を助けるといふ科学的根拠もあるが、農民に一年の豊作を信じさせる心理的効果の意義が大きく、元旦に樹の上に落ちた雪の形で豊凶を占う習俗も紹介されている<sup>93</sup>。この他、前述の「転九曲」は、本来一年の天候の安定を神に祈るものであった。

民衆の心性に訴え、民衆に理解しやすい形で宣伝を行う中で、迷信の要素が許容されていく例も見受けられ、また政権の権威確立のために民間信仰を利用する状況も認められる。農諺の中には、生産運動で引用された科学的根拠を持つもの

以外に、早魃、冷害などを節句の天候などで予想するような迷信もあり、中共政権が強調する農諺とこれら迷信の農諺は、民衆の中では明確に区別されるものではなかった<sup>94</sup>。四五年には、政府が迷信を提唱していると疑われるような「半神半人」の年画が作られ、新華書店などを通じて売られたことや、雨乞いの無益さを理解させるため、区級幹部が民衆とともに龍王の神輿を担いだことが議論を巻き起こしている<sup>95</sup>。中共の政策を受け入れて多数の改良講談を創作した民間講師の韓祥起は、自らも民間信仰の世界に留まりながら、中共の政策意図を伝えようとし、民衆の祭祀に際して、位牌に「土地労働大神」や共産党、解放軍の「神さま」を呼び出している<sup>96</sup>。この他、庙会などで治療にあたる衛生工作員が民衆に「生き菩薩」、「生き娘娘」と称せられ、春節の大会で八路军、共産党が「生きた神仙」などと讃えられており、中共政権もそれを民衆の支持の現れとして宣伝している<sup>97</sup>。擁軍運動その他の負担も信仰を媒介とすることで、民衆の抵抗を和らげようとする意図が伺える。

前述の劉志丹の公祭で靈柩の行列が各地を通過する際、多くの民衆が自発的に路傍に祭壇を設け線香をあげて劉を祀っているが、陝区の機関紙はこれをむしろその人望の高さを示す証明として宣伝している。延安では、このような行為が迷信にあたるのではないかと相談に訪れた鉄工職人に対し、区長が「自分たちのやりたい方法で、気持ちを表せばよい。」と許可を与えている<sup>98</sup>。紙銭や線香の使用も、一般には浪費や

迷信として批判されたが、革命烈士の墓参や追悼に関してのみ、肯定的扱いを受けている。

整風運動を契機に高まる毛沢東個人崇拜の機運は、上述のような民衆の心性と中共の宣伝工作の有り方にも支えられていた。毛沢東ら指導者の画像は、四四年のメーデーより一般への販売が確認されるが、四五年の春節期には年越しの年画とともに各地で販売されている。毛を太陽になぞらえ、五穀豊穡をもたらすその指導力を「人民の救いの星」と讃える民謡が労働英雄や移民によって作られ、毛への信仰に近い民衆の感情が宣伝され続ける。その一つである「東方紅」の原歌では、「毛主席は治国に功勞があり」、「民衆は唐堯として讃える」とも歌われている。四五年には、大岳区の龍抬頭の廟会で、神を祭る代わりに毛への敬礼が行われていることが伝えられている。この時期、「毛主席は言ったことは何でも実現させる」、「凶作と言えば凶作になる。今年は凶作というから凶作だ。どうにもならない。」という考えが陝区の一部民衆に広まったといわれ、毛沢東の指導力が、天候と豊凶をも司るものとしてとらえられていることを伺わせる。

内戦期に入ると、中共は民衆の威信をかり取り、国民党との闘争に勝利するために、民間信仰に関わる民俗の利用を更に進めていることが伺える。四六年七月の『解放日報』の一面では、減租減息で豊かになった晋冀魯豫辺区長治新区の農民が、「吉日佳節」ごとに毛沢東の画像を拜んでいることが報じられている。ただし、この記事では村幹部が中共成立記

念日に毛の画像を購入してきたことも伝えられ、新暦の時間も強調されている。四七年春節には、晋冀魯豫辺区左権県竹寧村の全民衆から、毛の「長生不老」、「万万年」の長寿を祈る手紙が届けられ、「精算闘争」により旧一二月二三日に豊かな年越し準備が出来るようになったことに感謝し、蒋介石打倒と生産に励む決心が語られている。また、この日の集市において皆が毛の画像を買ったことが記されている。

### おわりに

中共は、特に四二年以後、農暦の時間を利用することで、民衆の組織、動員に一定の成果を上げることができた。農暦の時間は、人々の心性に沿う形で、各種宣伝、生産の発展、民生の改善、政権の権威確立などが達成される範囲において利用され、民間信仰の要素も取り入れられていた。そこには、困難な闘争を戦い抜く中で、利用できるものを全て利用するという中共の現実主義的な対応を見ることができ、中共政権が新暦による辺区社会の組織化を目指していたことを考慮するならば、農暦に依拠しなければ動員が困難な辺区社会の状況が、改めて確認される。小論では、この点に関して、社会経済関係との関わりの中で農暦の問題を充分に明らかにすることができなかった。庙会や節句の活動を主宰する地域の有力者や、庙会、集市において活動する商人層などと農暦利用の政策との関係、農作業や労働互助における農暦の時間

の社会的実態と辺区の生産運動の関わりなど、明らかにされねばならない課題は多い。特に、家父長的経営の強化によって増産を図る労働英雄や、血縁の紐帯によって移民や労働互助を進める農民にとって、農曆の時間は個別経営の基礎として重要な意義をもっていたと考えられるが、増産奨励のためのこのような生活のリズムの利用と新曆の浸透の方針がどのように関わっていくのか、更に検討が必要であると考える。また、時間と民俗に関して人生儀礼の問題についても検討することができなかった。今後の課題としたい。

註 使用頻度の多い史料については、以下のように略号を用いる。

- A: 『新中華報』、B: 『解放日報』、C: 『辺区群衆報』  
 D: 陝西省檔案館、陝西省社会科学院『陝甘寧辺区政府文献選編』  
 第一〜三輯(D1〜13と略)、檔案出版社、八九年〜九一年。  
 (1) 田中恭子『土地と権力』、名古屋大学出版会、九六年六月。  
 (2) David Holm, *Art and Ideology in Revolutionary China*, Clarendon Press Oxford, 1991、李世偉『中共与民間文化』、知書房出版社、九六年六月。  
 (3) A三八年七月一五日、三九年三月一六日、五月二三日、四〇年九月一五日。  
 (4) A三七年五月九日、三八年七月一〇日、三九年五月七日、九月八日、B四二年七月八日など。  
 (5) A三八年五月五日、七月一〇日、一一月一〇日、B四三年七月六日、一〇日。  
 (6) モナ・オズーフ『革命祭典』(立川孝一訳)、岩波書店、八

九年七月、vii頁。

(7) A三七年一月三〇日、五月一三日、三八年二月五日など。

(8) 『陝甘寧辺区民衆敵後援会工作概況』、三九年一〇月(奥付なし)。

(9) 陝区社会への新曆の浸透については、中共政権以前の状況を含めて検討されなければならないが、小論では明らかにできなかった。今後の課題としたい。

(10) 陝甘寧辺区中央教育部「關於冬学的通告」、三七年一〇月一三日、呂良「辺区的社会教育」、中央教育科学研究所編『老解放区教育資料』(二)抗日戦争期下冊(以下『教育資料』2抗下と略記)、教育科学出版社、八六年一二月、二、一一頁。

(11) 陝甘寧辺区教育庁第十一号通告「關於冬学問題」、三八年九月六日、『教育資料』2抗下、二二頁、辺区政府「徵収五万石救国公粮的訓令」、三九年一二月二六日、陝甘寧辺区財政經濟史編写組、陝西省檔案館『抗日戦争時期陝甘寧辺区財政經濟史料摘編』第六編、陝西人民出版社(以下、『財政史料』6と略記)、八〇年五月、一一〇頁、「保証責任陝甘寧辺区合作社聯社章程」、三九年一〇月一七日、『財政史料』7、五二七頁。

(12) 陳学昭『延安訪問記』(中野美代子訳)、小野忍編『延安の思い出』、平凡社、七二年四月所収、一五六頁。

(13) 表2の作成には、『延安市志』、九四年一二月、『安塞県志』、九三年五月、『米脂県志』、九三年三月、『甘泉県志』、九三年一〇月、『子長県志』、九三年一二月(以上、陝西人民出版社)、

『塩池県志』、八六年三月、『鎮原県志』(上、下)、八七年四月(以上、寧夏人民出版社)、『慶陽県志』、九三年一月(甘肅人民出版社)などの陝区該当地域の地方志を使用した(編者は各書の編纂委員会)。以下の農曆の節句の説明等も、特にことわりのない限りこれらによる。また、新曆と農曆の対照、曜日の検索には、黒坂紘一、河村真光『20世紀の曆』(光村推古書院、九四年二月)を使用した。

- (14) 「陝西省雇農工大会簡章及鬭争綱領」、三六年九月二四日(陝西省總工会上運史研究室編『陝甘寧辺区工人運動史料選編』(上)、九九頁、工人出版社、八八年三月)では、清明節、端午節、中秋節、冬至の「四節」の休暇要求が提示されている。
- (15) 内田正男『曆と時の事典』二二九〜二四頁、雄山閣、八六年五月。
- (16) 李喬『中国行業神崇拜』、中国華僑出版公司、九〇年六月。
- (17) この点については、民衆の「集合的心性」と革命運動の関わりを論じた、ジュルジュルフェューブル『革命的群衆』(二宮宏之訳、創文社、八二年)も参照。
- (18) A三七七年二月九日、一九日、三月六日、六月一六日、三八年一月一五日、六月一五日、三九年二月一三日、二八日、三月三日、四〇年三月一五日、四月二六日など。
- (19) この間の民俗様式と文芸政策を巡る議論については、ホルム前掲書八三〜一〇一頁、李世偉前掲書六八〜一一二頁を参照。
- (20) A三八年一月一〇日、三九年二月二三日、二八日、四〇年

三月二六日。

- (21) A三七七年四月六日、三九年四月一〇日、四〇年四月二三日、柏明、李穎科『黄帝与黄帝陵』一一五〜六頁、西北大学出版社、九〇年九月など。なお、三八年の「民族掃墓節」は、張国黨逃亡事件の舞台となったため、報道自体が行われていない。
- (22) B四二年二月一五日、一六日、一七日、一八日、一九日、二一日、三月二日、三日など。
- (23) B四三年一月二一日、二四日、二月一五日、二月一八日、二月二四日、四月九日、四四年一月二六日、二月四日、二月八日、四五年二月一三日、二月一九日など、B各所。
- (24) B四三年二月一日、一四日、二八日、三月一日、四四年一月二六日、二月三日など。
- (25) B四三年一月三〇日、四五年三月二二日、四月一二日など。また、李世偉前掲書一六四〜八四頁参照。
- (26) B四三年一月一三日、二月二二日、四五年三月六日など。
- (27) B四四年二月一〇日、一二日、四五年二月一九日、一七七日、四六年二月一三日、四七年一月二八日、C四六年二月一七日など。春節の秧歌劇運動については、ホルム前掲書を参照。
- (28) B四四年一月九日、二月八日、一〇日、二五日、二九日、C四四年三月一九日。
- (29) B四五年二月一三日、一五日、一八日、二〇日、二二日、三月一日、四日、四六年二月二一日など。
- (30) B四二年九月二一日、四三年二月一日、三月六日、七日、九月七日、一二月一八日、四四年二月一六日、三月一四日、

- 四五年八月二日、三〇日、C四四年四月三〇日、五月一日、八月二日、二九日、四六年三月一七日などB、C各所  
 「陝甘寧辺区政府指示信」四四年二月二六日、D8八1〜八二頁。陝区の代表的農諺は、『安塞県志』八〇〜一頁、一四〜七頁、『米脂県志』五九一〜三頁、『慶陽県志』三三〜五頁を参照。
- (31) B四三年四月二四日、四四年七月二六日、八月二日、四五年七月七日、四六年七月一日など。
- (32) B四三年一月三〇日、四四年四月五日。
- (33) B四一年二月一八日、四二年二月一八日、四三年四月五日、四四年四月六日、二六日、四五年四月一四日など。
- (34) 趙平「開展警備区工会工作的經驗」、四〇年七月七日、『陝甘寧辺区工人運動史料選編』（上）四六〇頁、B四一年六月三日、五日、四二年六月一八日、四三年六月一六日、八月一五日、四四年七月二四日、四五年六月二九日など。
- (35) B四三年九月九日、一七日、四四年一〇月二三日、四五年九月二二日、四六年九月六日、一三日、一四日など。また、四三年、綏徳分区のスパイ摘発の動員大会は、中秋節前日より開かれているが、自白後の団結を強調する当時のスパイ摘発の方針から推察すると、中秋節の家族主義的団結を前提として、日程が決められた可能性も考えられる（B四三年一〇月二日）。
- (36) B四四年八月一六日、九月六日、四五年一月二一日など。
- (37) 「開鑿工」、華池県志編写領導小組『華池県志』、二六一〜二頁、甘肅人民出版社、八四年二月、B四四年四月五日など。
- (38) 「陝甘寧辺区政府便函」、三九年五月九日、陝西省檔案館、B四二年二月一九日など。
- (39) B四四年七月一五日。
- (40) A三七年六月三日、三八年二月一九日。
- (41) B四四年五月五日、一〇月六日、四五年二月二〇日、五月五日、C四五年五月一三日、四六年一月一日など。
- (42) 大集市は一般に廟会から発展したため、廟を中心に節句に開かれ、劇団を招いて成立するなど、民間信仰の要素を残している。
- (43) B四三年八月六日、七月二六日、四四年九月二三日、『子長県志』三六三〜四頁、吳旗県地方志編纂委員会『吳旗県志』三九五頁、三秦出版社、九一年一月など。この時期の陝区の商業活性化政策については、今井駿「辺区政権と地主階級」、『講座中国近現代史』6、東京大学出版会、七八年を参照。
- (44) B四三年七月一五日、一〇月一日、一三日、二二日、二八日、一一月三日、一二日、一六日、一二月五日、一〇日、一九日。
- (45) B四三年一月二七日、二八日、一二月三日、一三日など。
- (46) 『群衆』四五年四月三〇日、丁世良、趙放主編『中国地方志民俗資料彙編』西北卷、八六、一一一、一一三、一二〇、一九一頁、書目出版社、八九年九月、烏丙安『中国民俗学』三〇一頁、遼寧大学出版社、八五年八月、『安塞県志』八〇頁など。
- (47) B四三年七月二〇日、二八日、三〇日。延安地区の集市の日取りについては、『延安市志』三二二〜二頁を参照。

- (48) B 四四年五月二日、一〇月九日。
- (49) B 四三年五月二三日、四四年九月二四日、一二月二三日、四五年三月二四日。
- (50) B 四一年一月一九日、四二年一月三〇日、四四年一月一〇日、四五年一月二日、三日、一二月二九日、四六年一月二日など。
- (51) A 四〇年五月七日、B 四一年三月一三日、四三年一月一八日、四四年三月一七日、二〇日、七月八日など。
- (52) B 四三年三月五日、一七日、二四日。「転九曲」については、『安塞県志』五七九頁、ホルム前掲書一九四〇七頁を参照。
- (53) B 四二年七月一四日、一五日、四三年一月一一日、一五日、一六日、四四年五月一五日。
- (54) B 四五年二月一八日、二八日。陝区の一部では旧一月一六日に外出すると、一年の健康が得られるという信仰がある。『吳旗県志』八六八頁、延長県地方志編纂委員会『延長県志』五七六頁、陝西人民出版社、九一年一月、『慶陽県志』四六八頁。
- (55) B 四三年四月六日。四三年の山東根拠地における児童デーの児童植樹運動もまた、清明節を意識したものと考えられる。(B 四三年四月七日)。
- (56) B 四〇年四月一六日、四四年三月一七日、六月一六日、九月二七日、C 四五年一月七日など。
- (57) B 四四年五月七日、一五日、六月一日、九日、一〇月一九日、「介紹大衆合作社」、四四年六月、『財政史料』7、三七
- 八頁。
- (58) 猶厚生「辺区延川党支部教育的概況」、四一年三月二四日、『共產党人』第一七期、四一年四月、B 四四年一月六日、二三日、四五年二月一日、一二月二七日、郭林「延属分区冬学総決材料」、四五年六月一八日、『教育資料』2 抗下、七七〜八五頁など。
- (59) B 四四年四月一日、五月二八日、六月四日、一二月三日、四五年五月二五日、C 四五年七月一日など。
- (60) B 四三年四月一三日、八月四日、四四年四月一七日、四五年三月一七日、四月一日などB各所。
- (61) B 四四年一月一日、二八日、二月二日、四五年四月四日など。
- (62) B 四四年一月二八日。
- (63) B 四三年六月二日、七月一四日。
- (64) 「陝甘寧辺区布告 禁止仏教会、一心会活動」、三八年七月一五日、D1、八二〜八三頁。A 三八年一〇月二〇日など。
- (65) B 四四年四月二日、一二月一〇日、四五年一月二日。
- (66) B 四五年一月二日、一二月二日、C 四五年七月八日など。
- (67) B 四四年一月一〇日、四五年一月一日、二月二〇日など。
- (68) B 四四年四月五日、四五年四月一七日、C 四五年五月七日。
- (69) なお、四三年と四六年の中元節には、林森国民政府主席と陶知行の追悼大会が開催されているが、これらの日は日曜日でもあり、中元節への言及も特にみられない(B 四三年八月

- 一七日、四六年八月二日）。
- (70) B 四一年八月十五日、二七日、『慶陽県志』三〇四頁。
- (71) B 四二年一〇月五日、四三年四月二〇日、五月三日。
- (72) 「陝甘寧辺区政府關於民政工作方面条例、提案、意見等給民政庁的函」、D 13、一〇六頁、「陝甘寧辺区政府民政庁通知」、四九年三月一三日、陝西省檔案館。『延長県志』五六四頁によると、同県では、陝区政府期より清明節の烈士陵墓参が行われていたとされるが、これが抗戦期を含むものかは不明。
- (73) B 四三年三月一六日、四六年三月一〇日。
- (74) B 四三年一月二二日、三月六日、七日、四四年一月八日、二月一日、二四日などB各所。
- (75) 『安塞県志』一一四〜七頁、『延長県志』七五頁など。
- (76) B 四五年三月二二日、四月一二日、五月一八日、七月九日、一九日、九月二三日。また、李世偉前掲書一六四〜八四頁参照。
- (77) 柯藍『延安十年』、四九年九月（新島淳良訳）、前掲『延安の思い出』所収、二四九〜五二頁。
- (78) B 四四年四月二九日、四三年二月二〇日、C 四四年六月一八日、一二月三一日など。
- (79) B 四三年三月二三日、二四日、二五日、二七日、五月六日。
- (80) B 四五年一〇月七日。
- (81) B 四四年三月一日。「東方紅」の成立については、李世偉前掲書一五四〜五頁、楊興「《東方紅》和它的作者李有源」二三八〜五一頁（中國民間文芸研究会上海分会、上海文芸出版社編『中國民間文学論文選』中、上海文芸出版社、八〇年五月）を、易姓革命思想との關係についてはホルム前掲書三三三頁を参照。
- (82) B 四五年四月一八日。
- (83) C 四五年六月一二日。
- (84) B 四六年七月八日、四七年一月二五日、C 四七年二月五日。  
(広島女学院大学)

## 陝甘寧辺区の紀念日活動与新曆・農曆的時間

丸田孝志

對於中国共产党領導的革命運動与民衆的行動之間的關係，已有各種角度的研究成果。併最近的研究提起，以自己的安全為第一，其次考慮人際關係和道德規範，最後權衡經濟上的得失而行動的農民模式。但是，關於道德規範的問題，還有民俗、民間信仰等尚未討探的課題。為了進一步考察此問題，拙文分析了中共在陝甘寧辺区推广的新曆的時間与農曆之間的關係。新曆的紀念日，不僅因国内外政治上的需要受到重視之外，而且在加強民衆對於革命的認同感上甚為重要。新曆的生活節奏也在提高政治動員的効率上受到重視。而農曆是民衆進行信仰、農事、經濟等各種活動的時間根柢，即民衆自己的生活節奏。中共尤其是在一九四二年以後，積極利用了這些民衆自發性的農曆活動（節令活動、廟會、集市）与包括民間信仰在內的民間意識形態，得到了政治動員上的一定的成果。但是，推广新曆的方針併沒放棄。中共除了利用民間形式和農曆的時間組織許多紀念日活動之外，還要通過各種組織和典型貫徹新曆的意義和節奏。